

'25

推薦

# 小論文 1

(医学部医学科)

## 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は1冊（12頁）、解答用紙は3枚、下書用紙は3枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等がある場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答欄に記入してください。
  - (1) 文字はわかりやすく、横書きで、はっきり記入してください。
  - (2) 解答の字数に制限がある場合には、それを守ってください。句読点や括弧も1文字として数えます。段落を変える際に解答用紙にできる空欄は文字数に含みません。この場合、字数制限を守れば解答欄の枠をはみ出ることを可とします。
  - (3) 英数字を使用する場合は、2文字で1字とカウントしてください。ただし、「abc」や「1,000」など奇数個の文字が並ぶ場合には、最後の1文字を1字とカウントしてください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

(空白ページ)

(空白ページ)

次の文章は、著者が、目の見えない人へインタビューを行い、目の見えない人がどのように世界を認識しているのかを理解することをテーマとして書いた文章の一部です。この文章を読み、問1～問4に日本語で答えなさい。

## ユーモア 生き抜くための武器

客観的で抽象的な「情報」に対して、具体的な文脈に埋め込まれ、その人ならではの視点を含んだ「意味」。意味には、見えないことでおのずと生まれてくる意味と、見えない人が意図的に作り出す意味があります。最終章となる本章では、見えない人が意図的に作り出す意味の究極形態としての「ユーモア」について考えたいと思います。

ユーモアとは、笑いを誘う発言や行為のことです。本章では、障害そのものが笑いの対象となるケースを見ていきます。

さて、障害というと一般的には「深刻なもの」というイメージでとらえられる場合が圧倒的です。病気や人の死と並び、「笑ってはいけないもの」の代表選手にリストアップされがちです。

しかし、実際に見えない人と接していると、しばしば周りを笑わせて盛り上げるような明るさを持っている人に出会います。もちろんそれは、計り知れない苦勞と背中合わせになった明るさでしょう。そのことを忘れてはなりません、そうした見えない人のユーモアに、私は自分の先入観を吹き飛ばされるような痛快さを何度も味わいました。

### 「不自由さ」の扱い方

見えない人にとって、社会は決して自分の体にフィットするようにはできていません。駅前には放置自転車だらけですし、画面はますますタッチパネルが増え、カードで買い物をすればサインを求められます。

この不自由さに対して、とりうる方法はいくつかあります。もっともストレートな方法は、行政に異議申し立てを起こしたり権利を求めて街頭でデモを起こすことでしょう。これらはいわゆる「市民運動」と呼ばれるものです。こうした活動は大切です、地道な努力が世論や行政にゆさぶりをかけた前例もたくさんあります。

でも、私がかかわった視覚障害者の中には、それとは別の戦略をとる人もいました。不自由な環境を物理的に変えようとするのではなく、その意味を変えることによって、生き抜く

うとするのです。

そこで使われる武器が「ユーモア」です。ユーモアたっぷりに不自由な状況を読み替えることによって、社会に無理矢理自分を合わせなければならないプレッシャーをかわしてしまふ。それはもしかすると個人的で、単なる強がりにつるかもしれない。でも決してそんなことはない、と私は思っています。

### **今日食べるパスタは、ミートソース味か、クリームソース味か**

難波さん（3DCG デザイナーの仕事をしていて、39歳の時にバイク事故で失明し、全盲）は、自宅でよくスパゲティを食べるのでレトルトのソースをまとめ買いしています。ソースにはミートソースやクリームソースなどいろいろな味がありますが、すべてのパックが同じ形状をしている。つまり一人暮らしの難波さんがパックの中身を知るには、基本的に開封してみるしかありません。ミートソースが食べたい気分有的时候に、クリームソースがあたってしまったりする。

はたから考えれば、こうした状況は 100 パーセントネガティブなものです。でも難波さんは、これを単なるネガティブな状況とは受け取りません。食べたい味が出れば当たり、そうでなければハズレ。見方を変えて、それを「くじ引き」や「運試し」のような状況として楽しむのです。「残念というのはあるけど、今日は何かなと思って食べたほうが楽しいですね。心の持って行き方なのかな」「『思い通りにならなくてはダメだ』『コントロールしよう』という気持ちさえなければ、楽しめるんじゃないかな」。

つまり難波さんは、見えないことに由来する自由度の減少を、ハプニングの増大としてポジティブに解釈しているのです。「情報」の欠如を、だからこそ生まれる「意味」によってひっくり返しているのです。

同様の見方をあてはめれば、自動販売機もおみくじ装置と化します。何が出るか分からないままボタンを押してみる。手軽に「今日の運勢」を試せます。

あるいは、こちらはふたたび難波さんの発言ですが、都会の混雑した道を歩くことを「お化け屋敷」と形容していました。難波さんは、リハビリ期間を終えた後、見えていた頃に住んでいた自宅で一人暮らしを再開しました。ところが、同じ町なのに駅までの道のりがそれまでとは全く別のものになってしまった。まだ「見えない世界の初心者」だったために、歩道に止めてある自転車や、思いがけない突起に、いちいちドキッとさせられていたのでしょう。「富士急ハイランドに最恐戦慄迷宮という、一度入ったら何時間も出られないお化け屋敷があるんですが、毎日があんな感じでしたよ(笑)」。

### **ぼくたちにとって表現のツールは限られている。だから……**

最初にこうしたユーモアに触れたとき、私は本当に頭がくらくらするような衝撃を受けて

しまいました。なぜなら、私が思い込んでいた障害者のイメージとあまりにもかけ離れていたからです。もちろん、すべての障害者がユーモラスというわけではないでしょうし、あるときはユーモラスな人が別のときにはそうでないこともあるでしょう。もしかしたら家に引きこもっていたい時間の方が長いかもしれない。そのことは承知のうえで、でも率直な感想として、そうしたユーモアが私の障害者に対するイメージを覆したのは事実でした。

まず、障害のある人の発言で笑う、という経験が新鮮でした。そのころはまだ、見えない人との関わりが浅い時期だったので、無意識のうちに自分が「ホスト役」の気分でした。ところが、見えない人が場を盛り上げ、自分がそれに乗っかるような形になった。その関係が新鮮でした。

もっとも、関わりが深くなるにつれて、視覚障害者で話し上手な人や話し好きな人が意外と多いことを知りました。ある人は、「ぼくたちにとって表現のツールは限られている。だから言葉で相手の心をつかめるように努力している」と語っていました。確かに、そのように心がけているうちに自然と話し上手になった人が多いのかもしれませんが。

たとえば木下路徳さん(生まれつき弱視で16歳のときに失明、現在は全盲)も、小学生で見えにくくなったときに、友達の輪に入りたい、こっちを向いてほしいという気持ちから、話術で人を笑わせられるようになろうと思ったといいます。そこで木下さんがとった行動は、ラジオを聞くことでした。ラジオの語りはまさに視覚像なしでリスナーを魅了できるかどうか勝負です。

「ラジオショッピングなんかでも、指輪がどんなにすごいかとか、カニがどういうふうに美味しいかをルポしたりするわけですね。それを聞いて、ラジオのパーソナリティみたいにしゃべれたら、楽しく過ごせるんじゃないかと、漠然と思っていました」

## 決められた道をかわす

しかし、パスタソースの衝撃は、単に見えない人の話の巧さ<sup>うま</sup>というだけでは説明が付きません。というのも、難波さんは笑いをとろうと思って話をでっちあげたわけではないからです。「話のための話」ではない。日々の生活の中で出会う思い通りにならない状況や、どうにもならない現実を、難波さんは実際に「運試し」のようなものとして楽しんでいる。そのことを紹介してくれたまでです。私たちはそこで、難波さんの「日常」を垣間見たにすぎません。

そう、彼らのユーモアは、「痛快」なのです。困難な状況をポジティブに生きていることへの感心や敬意ももちろん感じます。けれども、それだけでは笑いは生まれません。やられた！その手があったか！という感じ。その心地よさが笑いの原因でした。

均一なレトルトのパックや自動販売機のシステムは、言うまでもなく見える人が見える人のために設計したものです。率直に言って、見えない人を排除しています。福祉的な視点に立つなら、あるいは「情報」的な視点に立つなら、そうした排除は可能な限りなくしていく

べきでしょう。パッケージに切り込みの印をつけるようメーカーに要望したり、自動販売機に音声案内をつけるように働きかけたりすることもひとつの方法です。実際に、そのような製品も出回っています。

けれども、難波さんがとったのは全く別の方法です。健常者が、いわば「大まじめ」に中身どおりのソースをパスタにかけているかたわらで、難波さんはそれを遊びのツールとしてもとらえている。

いまだかつて、レトルトのパックで運試ししようと思った健常者がいたでしょうか。自分の体に合わないデザインやサービスをナナメから見てみる。そうすることで、彼らの方がむしろ遊んでいるのです。

健常者は、製品やサービスに埋め込まれた使い方におのずと従ってしまいます。そんなまじめなユーザーを尻目に、見えない人は決められた道をかかわしていきます。①「こっちの道もあるよ!」—— 何だか先を越されたような気分さえ感じます。

「こっちの道もあるよ!」と先を越されるのが痛快なのは、健常者の社会や価値観そのものが、障害者の使い道によって相対化されるからに他なりません。パスタソースや自動販売機の例は、笑いのジャンルとしては「自虐」に近いものです。ところが、自虐の攻撃対象がふつうはそれを口にする本人であるのに対し、この場合はなぜか言われた方もチクッとやられたような気分になる。だからこそ「痛」快なのです。

なぜ痛みがこちらに返ってくるのか。言うまでもなくそれは、笑いのネタに「障害」が関わっているからです。そして、それを聞いている私たちが、健常者だからです。

しかし、それは単なる痛みではありません。『痛』快は「痛『快』」でもあるわけで、何か「つかえ」がとれたような気分にもなる。痛すぎると笑えなくなってしまうますが、快さがあるかぎり、その笑いは建設的なものです。ではいったい、どんな「つかえ」がとれたのでしょうか。

序章で、健常者の善意がかえって障害者に対して壁を作ってしまう、というお話をしました。よく分からないからこそ、先回りして過剰な配慮や心配をしてしまう。「何かしてあげなければいけない」という緊張で、障害のある人とない人の関係ががちがちに硬いものになってしまうのです。障害者に対する悪意ある差別はもつてのほかですが、実は過剰な善意も困りものなのです。

障害を笑うことによって、「善意のバリア」がほぐれる。だから、障害を笑うユーモアは、決して個人的な強がりなどではありません。行政への異議申し立てや権利を求める市民運動とは違いますが、それは健常者の心の中にあるバリアに気づかせてくれるのです。

これこそ、痛快さとともにとれた「つかえ」の正体でしょう。もちろん配慮は大切です。けれども行き過ぎると全く逆の効果をもたらしてしまう。そこへ不意をつくようにユーモアがやってくる。ユーモアが緊張した関係をマッサージのようにほぐし、お互いの文化的差異を尊重するコミュニケーションの端緒に立たせてくれるのです。

## 障害とは何か

「障害者」というと「障害を持っている人」だと一般には思われています。つまり「目が見えない」とか「足が不自由である」とか「注意が持続しない」とかいった、その人の身体的、知的、精神的特徴が「障害」だと思われている。

しかし、②実際に障害を抱えた人と接していると、いまだ根強いこの障害のイメージに対しては、強烈に違和感を覚えます。端的に言って、こうした意味での障害は、その人個人の「できなさ」「能力の欠如」を指し示すものです。「できなさ」や「能力の欠如」だから、触れてはいけないものと感じられる。

何人もの研究者が指摘していますが、こうした個人の「できなさ」「能力の欠如」としての障害のイメージは、産業社会の発展とともに生まれたとされています。現代まで通じる大量生産、大量消費の時代が始まる時期、均一な製品をいかに速くいかに大量に製造できるかが求められるようになりました。その結果、労働の内容も画一化されていきます。車を作るのに、Aさんが作ったのとBさんが作ったのでは出来上がりが違うのでは困る。「誰が作っても同じ」であることが必要であり、それは「交換可能な労働力」を意味します。

こうして労働が画一化したことで、障害者は「それができない人」ということになってしまった。それ以前の社会では、障害者には障害者にできる仕事が割り当てられていました。ところが「見えないからできること」ではなく「見えないからできないこと」に注目が集まるようになってしまったのです。

こうした障害のイメージに対しては、1980年ころから、世界各国で疑問がつけられるようになります。さまざまな論争や事件の詳細な歴史はここでは記しませんが、「個人のできなさ」とは違う形で障害をとらえる考え方が模索されました。こうした運動は「障害学」という新しい学問をも生みだしました。

そして約三十年を経て2011年に公布・施行された我が国の改正障害者基本法では、障害者はこう定義されています。「障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるもの」。つまり、社会の側にある壁によって日常生活や社会生活上の不自由さを強いられることが、障害者の定義に盛り込まれるようになったのです。

従来の考え方では、障害は個人に属していました。ところが、新しい考えでは、障害の原因は社会の側にあるとされた。見えないことが障害なのではなく、見えないから何かができなくなる、そのことが障害だと言うわけです。障害学の言葉でいえば、「個人モデル」から「社会モデル」の転換が起こったのです。

「足が不自由である」ことが障害なのではなく、「足が不自由だからひとりで旅行にいけない」ことや「足が不自由なために望んだ職を得られず、経済的に余裕がない」ことが障害なのです。

もっとも、法律の定義が変わったからといって、それはあくまでお題目にすぎません。障

害の社会モデルがまだまだ浸透していないのは、障害を受け止めるアイデアや実践が不足しているからでしょう。障害は高齢化と密接な関係があります。高齢になると、誰でも多かれ少なかれ障害を抱えるからです。障害を受け止める方法を開発することは、日本がこれから経験する前代未聞の超高齢化社会を生きるためのヒントを探すためにも必要です。

ただ、注意しなければならないのは、社会の側に障害があるからといって、それを端から全部なくしていけばいいというものではない、ということです。「パスタソースを選べないこと」は社会モデルの定義にしたがえば「障害」です。しかしこの障害をなくすことは、見えない人のユーモラスな視点やそれが社会に与えたかもしれないメリットを奪うことでもあります。

もちろん味を選べたほうがいいのは当然です。しかし、見えない人と見える人の経験が100パーセント同じになることはありません。見える人がパックのビジュアルから想像する「味」と、見えない人がたとえばパックの切り込みで理解する「味」は、決して同じものにはならないでしょう。違いをなくそうとするのではなく、違いを生かしたり楽しんだりする知恵の方が大切である場合もあります。

いずれにせよ、「味が分かるようにするのがいいだろう」と健常者が見えない人の価値観を一方的に決めつけるのが一番よくないことです。「見えないこと」が触媒となるような、そういうアイデアに満ちた社会を目指す必要があるのではないのでしょうか。

伊藤亜紗著 『目の見えない人は世界をどう見ているか』 光文社新書 2015年 より改変

問1 下線部①に「こっちの道もあるよ!」とあるが、この比喻表現はどのような内容を意味しているのか、60字以内で説明しなさい。

問2 下線部②において、著者はなぜ「強烈な違和感」を覚えるのか、「産業社会の発展」による影響にふれながら、その理由を150字以内で説明しなさい。

問3 以下の状況をまず想定してください。

・目の見えているあなたが中学生時代に目が見えなくなってしまう、高校生になった今現在、リハビリを終えて慣れている場所であれば介助者がいなくても一人で外出もできるようになった。

この状況での日常生活において、あなたは目の見える人々とどのように接していこうと思うか、以下の点に留意して、あなたの考えとその理由を300字以内で説明しなさい。

- ・目の見える人と接する日常的な具体的状況を1つ想定すること
- ・その時に目の見える人が持ちうる「善意のバリア」を明示すること

問4 日本社会において、多様性を受け入れ、社会的マイノリティを尊重するにはどうしたらいいと考えるか。目が見えないこと以外の具体的な多様性のテーマを1つ挙げ、本文の内容にふれながら、あなたの考えを500字以内で説明しなさい。

(以下 余白)

(空白ページ)

(空白ページ)